

肥満児の食事と血清脂質

楠 智一
衣笠昭彦
町田幸康
清沢伸幸

京都府立医科大学小児科

【目的】

肥満小児に過食がみとめられ、かつ高脂血症の頻度の高いことは広く知られた事実である。しかし、具体的に食事として摂取されたどの栄養素が血中脂質のどの画分の上昇に関係しているかという点については、とくに肥満児について検討された成績がほとんどみられない。われわれはこうした実情を明らかにする目的で以下の調査を行なった。

【対象および方法】

昭和58年7月より年末までの間に当科肥満児外来を訪れた54名の肥満児について、初回来院時の肥満度、栄養摂取量、血清トリグリセライド、総コレステロール、HDL-コレステロール、動脈硬化係数(AI)、GOT、GPTなどの測定値を整理した。その結果を表1(省略)に示す。この成績にもとづき、各項目間の相関関係、および各計測値別区分の頻度についての相関関係をコンピューター処理によって検討した。

なお対象肥満児の男女数はともに27名ずつ、肥満度別では、+20-29%の軽度例が3例のみ、他は+30%以上の中等度、高度例で、+50%以上の極端な高度例を24例を占めていた。

【結果】

1. 摂取エネルギー量、脂質・糖質の摂取量またはエネルギー比、血清各脂質濃度、AIと肥満度との間に相関はなかった。
2. 摂取エネルギー量と血清各脂質濃度、AI、GPT値との間に相関はなかった。
3. 脂質摂取量と血清各脂質濃度、GPT値、AIとの間に相関はなかった。
4. 糖質摂取量と血清各脂質濃度、GPT値、AIとの間に相関はなかった。
5. 摂取糖質または脂質のエネルギー比と上記

の各検査値との間に相関はなかった。

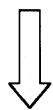
6. 肥満度を+30%未満、+30-50%、+51%以上の3段階に分け、総コレステロールを200mg/dl未満と200mg/dl以上、トリグリセライドを100mg/dl未満と100mg/dl以上、AIを3.5未満と3.5以上、GPT値を40単位以下と41単位以上にそれぞれ区分して、肥満度区分と各検査値区分の例数分布の相関を調べた。その結果血清トリグリセライド値とGPT値は、肥満度が高くなる程上昇の傾向を示した(5%以下の危険率)。(表2. 省略)

7. 年齢を6歳以下、7-10歳、11歳以上の3段階に分け、各種検査値を6に記したと同様に区分して、年齢区分と検査値区分の例数分布の相関を調べたが、有意の関係はみとめられなかった。

8. 年齢を上記のように区分し、食事中的脂質のエネルギー比を30%未満と30%以上、糖質のエネルギー比を55%未満、55-60%、61%以上に区分して、年齢区分と摂取エネルギー比区分の例数分布の相関を調べた。その結果、年少肥満児に脂質エネルギー比の高い例が多い傾向をみとめた。(表3. 省略)

肥満児に高脂血症の例が多いことは周知のとおりであるが、栄養摂取量と血清脂質の測定値との間には特定の相関は認められなかった。ただし、肥満度の進行にともない血清トリグリセライド値が上昇すること、年少の肥満児の食事に脂質のエネルギー比が高い傾向のみられることは、今後の肥満児対策に当たって十分考慮すべき点であろう。

いずれにせよ、さらに例数を重ねて検討の予定である。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



【目的】

肥満小児に過食がみとめられ、かつ高脂血症の頻度の高いことは広く知られた事実である。しかし、具体的に食事として摂取されたどの栄養素が血中脂質のどの画分の上昇に関係しているかという点については、とくに肥満児について検討された成績がほとんどみられない。われわれはこうした実情を明らかにする目的で以下の調査を行なった。